書と詩10 ー書（画、舞踊など）・歌謡・詩・言葉・音・こころー

明治・大正・昭和・書道界略年表

1868年（慶応3）1月3日、**王政復古**の大号令　江戸幕府廃止　**神仏分離令**（廃仏毀釈）橘曙覧没
江戸を東京と改称。10月23日、明治に改元。九段に東京招魂社できる（明治2）
1869年（明治2）東京が首都に。京都に、**日本初の小学校**（柳池小）征韓論（明治3）**大教宣布**（**明治3**）
1872年（明治5）工学寮設置　**廃藩置県**　岩倉使節団出発　**公用書体御家流から唐様へ転換。文明開化**
学制公布により「**習字**」という名称が使われ、初等・中等教育と教員養成過程において、習字は必須科目となる。　貞心尼寂滅　太陽暦採用　鉄道開通　東京国立博物館創設
1873年（明治6）明治6年の政変（征韓論争）　西郷隆盛辞職し帰郷　ウィーン万博（日本政府公式に初参加）
1874年（明治7）女子師範学校設立　台湾を武力で征伐
1875年（明治8）蓮月尼寂滅　福沢諭吉『文明論之概略』　朝鮮と交戦
1876年（明治9）工部美術学校設立（明治16年閉鎖）
1877年（明治10）**第一回内国勧業博覧会**　西南の役（西郷南洲没）　東京大学設立
1878年（明治11）フェノロサ来日。　大久保利通暗殺される　東京招魂社を靖国神社と改称（明治12）
1879年（明治12）長三洲退官　円山大迂、上海遊学、両刃の刀法を日本に伝える　清談会創立　龍池会設立
1880年（明治13）**楊守敬来日**　**六朝風書道盛ん**　中林梧竹長崎へ　日本初の公立画学校、京都府画学校創立
1881年（明治14）第二回内国勧業博覧会　興亜会設立（1880）
1882年（明治15）5月、フェノロサの講演「**書ハ美術ナラズ**」**論争**　中林梧竹渡清し潘存に師事、六朝書道を学ぶ
5月、鑑画会設立（岡倉天心、フェノロサ）
1884年（明治17）楊守敬帰国　梧竹帰国し上京
1885年（明治18）文検**始まる**　前田黙鳳、渡清　内閣ができる　**脱亜入欧**　**富国強兵**　**殖産興業**
1886年（明治19）巻菱潭没　小学校令　**国粋主義高まる**　**鹿鳴館時代**始まる
1887年（明治20）日本美術協会　東京美術学校設立　東京音楽学校設立　御歌所設置される（明治21）
1889年（明治22）東京、京都、奈良に帝国博物館建設　浅井忠ら、明治美術学校設立　大日本帝国憲法発布。
1890年（明治23）第三回内国勧業博覧会　ー難波津会」の結成　六書会　教育勅語発布　フェノロサ帰国
小野鵞堂、斯華会結成　鳴鶴、杭州で兪樾らと交流　京都に日本初の水力発電所（1891）
この頃**建碑ブーム**　**上代様仮名の復興**　鳴鶴、同好会創立　**日清戦争**宣戦布告
1893年（明治26）第四回内国勧業博覧会　中村不折　中国に従軍　京都に日本初の市街電車（チンチン電車）
1896年（明治29）大口周魚、西本願寺本三十六人集発見　京都で日本初の映画上映（1897）
1897年（明治30）**甲骨文字発見**。　勝海舟没（1899）　康有為、日本に亡命
1898年（明治31）第三次小学校令により**仮名の字形・字母統一**、一音一字となり、異体字は**変体仮名**と呼ばれた。義和団の乱　六書協会、展覧会を主催（1901）　正岡子規没（1902）
1900年（明治33）第五回内国勧業博覧会で書が美術部門から削除された。**書道会の創設盛ん**
1904年（明治37）一六没・蒼海没（1905）　**日露戦争**（～1905）
1907年（明治40）中井敬所、帝室技芸員に選ばれる
1908年（明治41）東京美術学校図画師範科設置（「習字」科の講師に比田井天来、小琴、石橋犀水らがあたる）
スタイン敦煌探検　丁未印会創設　日本書道会創立　第一回文展
1909年（明治42）健筆会創設　米山没　ペリオ敦煌へ　フェノロサ没
1910年（明治43）第二次大谷探検隊李柏文書発見　健筆会の第一回展覧会　伊藤春畝（しゅんぽ）暗殺される
大逆事件。日韓併合。朝鮮総督府設置。
1911年（明治44）日本書道会の第一回展覧会　『書苑』創刊　法書会　羅振玉・王国維京都移住　辛亥革命
1912年（明治45）談書会成立　第二回東京勧業博覧会開催、美術部に新たに書道部が加えられた
楊守敬『**学書邇言**』刊行　明治天皇没、大正と改元。中華民国成立。
1913年（大正2）梧竹没　岡倉天心没　日本書道会が主唱して、官設の展覧会に書道を加えるべきことが建議された
この頃から鵞堂流などの分派発生　山本竟山ら平安同好会設立
1914年（大正3）第三次大谷探検隊敦煌へ　パナマ運河開通　**『六朝書道論』**刊行　**第一次世界大戦**（～1918）
帝国劇場で全国書道大会　大同書会設立　フサイン・マクマホン協定（1915）
帝国美術院創立　文相、毛筆廃止論　地方で習字廃止論　ロシア革命　サイクス・ピコ協定（1916）
平安同好会が平安書道会と改称　国際連盟成立　ナチス誕生　中国共産党成立（1921）
1916年（大正5）鳴鶴没　東京平和博覧会開催　小野鵞堂没
1917年（大正6）古典保存会が創設され、貴重文献の影印が行われることになった　関東大震災
1919年（大正8）「日本書道作振会」結成　鉄斎没　レーニン没
1920年（大正9）「日本書道作振会」第一回展覧会開催
1921年（大正10）東京府立美術館で、**日本初の全国的な書道展**が開催された。「日本書道作振会」分裂
1922年（大正11）戊辰書道会創立、第一回展開催　春興会創立（謙慎書道会の前身）
1923年（大正12）「泰東書道院」設立、第一回展開催　『梧竹堂書話』刊行
1924年（大正13）関西書道会第一回展開催　「東方書道会」設立
1925年（大正14）金子鴎亭、「新調和体」提唱　謙慎書道会創立、第一回展開催　書道芸術社創立
1928年（昭和3）三楽書道会創立　中部日本書道連盟創立　内藤湖南没
1930年（昭和5）中部日本書道連盟第一回展　中林梧竹遺墨展（上野・府美術館）
1932年（昭和7）日本美術協会第百回記念展開催　中村不折、書道博物館開設　スペイン内戦
1933年（昭和8）「大日本書道院」設立、第一回展　帝国芸術院設立　書道芸術社、第一回同人展
1934年（昭和9）日満親善書道展開催　『天来翁書話』刊行
1936年（昭和11）興亜書道連盟創立、第一回展（北京）　**第二次世界大戦**（～1945）
1937年（昭和12）書道革新協議会結成　東亜書道協会創立　日本軍、マレー作戦・真珠湾攻撃（**大東亜戦争**）
1938年（昭和13）大政翼賛会書道報国会設立　長尾雨山没
1939年（昭和14）大日本書道報国会（大東亜書道会）創立　中村不折没　東京府と市、東京都になる
1941年（昭和16）原爆投下　国際連合成立
1942年（昭和17）「日本書道美術院」設立、日本書道美術院再建書展（都美術館）インドシナ戦争（～1954）
1943年（昭和18）「日本書道美術院」脱退者が相次ぎ、新書道会が乱立（「書道芸術院」「謙慎書道会」「奎星会」）
1944年（昭和19）「日本書芸院」など）6334制、教育基本法、学校教育法など民主主義教育の誕生
1945年（昭和20）毎日書道会設立　第一回全国書道展開催　日展に第五科「書道」が設置された。
1946年（昭和21）世界人権宣言　朝鮮南北に分裂　ガンジー暗殺される
1947年（昭和22）日本書道院が日本書芸院と改称　最後の文検試験　中華人民共和国成立
1948年（昭和23）
1949年（昭和24）

近代の書

明治元年に**神仏分離令**が発せられ、民間で**「廃仏毀釈」**運動が起こり、寺院の仏像や経巻などの寺宝が焼かれたり、棄てられたりした。興福寺の五重塔が25円（現在の約20万円）で売りに出され、薪にされそうにもなった。

「廃仏毀釈」当時の木版画より　寺宝が焼かれている

破壊された仁王像の頭部など（宮崎県）

首が落とされた羅漢像群

神仏分離の思想は、明治維新以前から準備されていたようだ。岩倉具視と薩長両藩によって、王政復古させ立憲君主制による神権国家樹立のシナリオが、はやくから書かれていたと思われる。神仏分離政策の狙いは「権威化された神々の系譜の確立」であった。廃仏毀釈は、浄土真宗などの抵抗でしだいに収まっていったが、「国家神道」として確立していき、「日本人の精神史に根本的といってよいほどの大転換をもたらした」（安丸良夫氏）

この運動は、廃仏や廃寺だけではなく、新たに神社がつくられた。その一つが、戊辰戦争で戦死した官軍兵士の慰霊のため、明治2年に九段につくられた東京招魂社で、明治8年には、「嘉永6年（1853）以降に国事で倒れたすべての霊を祀る」ことが決まった。ここで言う、「すべての霊」とは、天皇のために死んだ者のことである。明治12年、明治天皇により「靖国神社」と改称された。また、宮中の儀式が変更され、はじめて天皇が伊勢神宮を参拝し、天皇を現人神とみなす計画がスタートした。

明治の初め、世間は文明開化の大流行。日本伝来の古美術がごみのように扱われ、書画骨董品がただのような値段で売られていた。また、明治4年の**「廃藩置県」**により、封禄を失った旧大名たちは、生活のため、所蔵していた骨董品や道具類を売り払い、それらが国外に流出したりした。

ビゴー「舞踏会へ行く男女」風刺画
明治20年頃？左上に「名磨行」

鹿鳴館時代の東京女子高等師範学校生徒
明治19年（1886年7月）夏服
明治19年10月より、この学校では、一般に洋服を着用することとされた。

日本の古美術の価値を知っている少数の人が、私財を投じて、国外流出の危機を救った。その収集家の多くは財閥であった。大倉集古館をつくった大倉財閥の大倉喜八郎。静嘉堂文庫を設立した、三菱財閥の創始者岩崎弥太郎の弟弥之助。三井財閥を樹立した益田孝や三井上層部の根津嘉一郎（根津美術館の設立者）らである。

建碑の流行

明治26年頃から始まった、建碑ブームは、漢字の書を、江戸時代以来の唐様とは違った、碑学派の漢字書法に転換させる大きな力となった。このブームは、漢詩文の大流行、国家主義精神の高まり、碑学の研究の進展などが重なって興ったものと思われる。ブームの始まりは、明治10年の木戸孝允、明治11年の大久保利通の神道碑を建てよという明治天皇の勅令であったが、政治的な理由によって、これらの碑が建立されたのは大正2年である。政治

的理由というのは、薩長藩閥政治に対する批判から国会開設、憲法制定へ、征韓論による分裂、反体制派の自由民権運動、それにともなう暗殺やテロ事件の頻発などと思われる。

日下部鳴鶴（くさかべめいかく）書「大久保公神道碑」（碑陽）
310×143×98㎝　東京・青山霊園内
揮毫は明治43年　1913年（大正2）建立
勅令は明治11年　北碑風楷書の集大成

書道教育

１８８０年（明治５）学制公布、近代の学校教育がはじまり、**「習字」**という名称が、書道の教科書に用いられ、初等、中等教育と教員養成課程において書道学習が必須科目とされた。福沢諭吉は、読み易く、書き易い、穏健な書き振りが、習字の手本には良いと提唱。諭吉の考えかたが、近代書道教育の源にあるようだ。

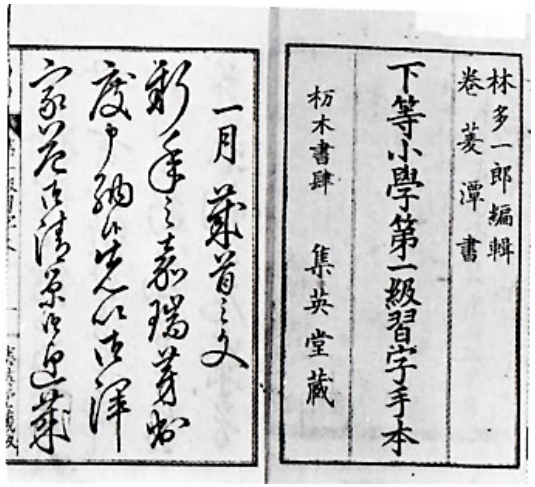
それは、王羲之→趙孟頫→巻菱湖という流れである。

明治の前半の習字手本を最も多く書いた人は、巻菱湖の流れを汲む、巻菱潭である。

明治36年、国定教科書制度が発足し、「国定本」時代が昭和20年まで続く。

この頃「習字」は「書き方」と改称された。

この時代は、文明開化、富国強兵のスローガンのもと、軍国主義拡張の時代であり、質実剛健が美徳とされ、書き方の手本は日高梅渓らの顔法的な強い書風に変化したが、書きにくく、あまり評判は良くなかったという。その反省から、菱湖風が復活したりした。昭和８年～15年まで使われた国定四期本の筆者、鈴木翠軒は国定教科書の花形と言われた。以後、初唐の楷書が書道教育の基準として確立された。

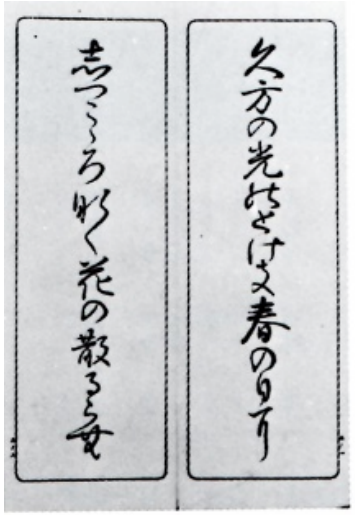


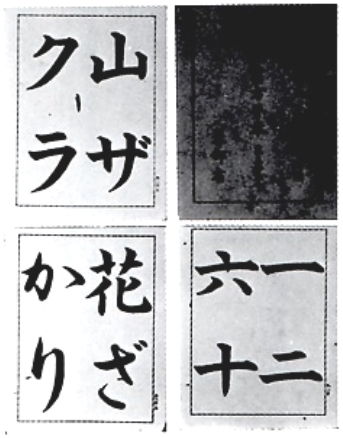
巻菱潭（まきりょうたん）「下等小学校第一級習字手本」明治９年

明治６年、全国で42451の小学校設置が目標にされた。

明治８年、全国で約24500の小学校が設置され、就学率は35%だったが、明治40年頃には約98%までになった。

学制序文に「必ず邑に不学の戸なく、家に無学の人なからしめん事を期す」と大目標が掲げられ、日本の近代の学校教育が始まった。





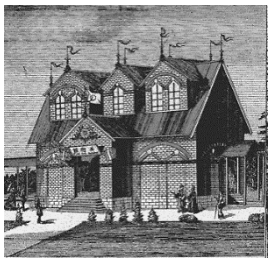
「文検」制度（書道教育者養成機関）

文検は明治18年（１８８５）に始まり昭和23年（１９４８）に終った初等、中等学校の書き方の指導目標は、正・速・美（整然と綺麗に）であり、実用主義一辺倒であった。しかし、昭和10年頃から、書道は実用的であると同時に、文字を素材とした造形芸術でもある、と芸術性が強調され、「文検」が「文検書道科」と改称された。合格率は５％ほどで大変厳しかった。

書道展覧会のめばえ

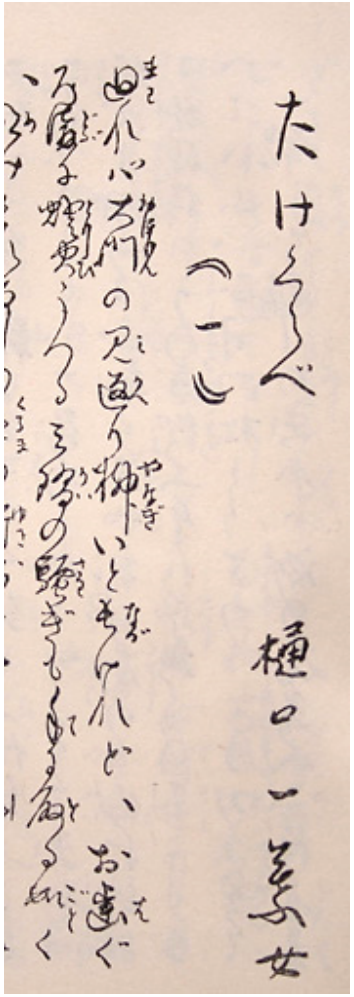
明治時代には、展覧会のための書道はまだない。一番古い展覧会は、１８７７年（明治10）８月、西南戦争開戦中に、初代内務卿の大久保利通が、富国強兵、殖産興業のスローガンのもと推進した第一回内国勧業博覧会である。これに、書は37点出品された。

１８９０年（明治23）、大槻如電、本田退菴らが六書会を設立し、日本初の書展、「六書会書道展」を上野公園華族会館別館で開催した。フェノロサの日本画讃美と、それによる日本画の流行に反発した大槻如電が独力で企画した書展であった。「東洋は絵より書が美術だ・・・」と頑張ったが、書展は赤字で失敗に終わった。



上代様仮名の復興

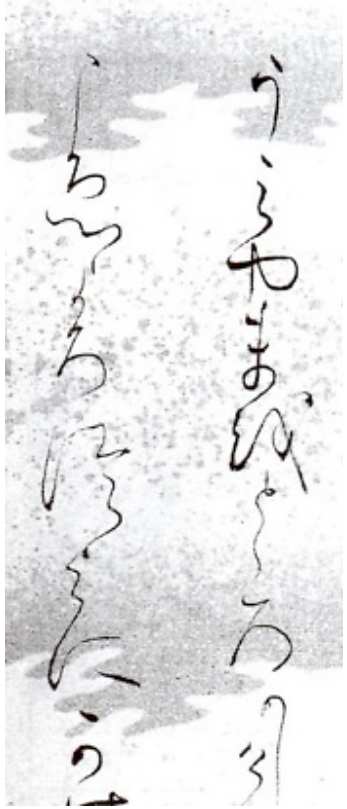
明治維新により、天皇制が復活（王政復古）したにもかかわらず、和様である御家流がすたれ、幕末の三筆から受け継いだ唐様の書が公用書体となり、日清戦争ころまで主流となったが、それでも、明治20年頃までは、江戸時代の延長で、まだ、御家流が一般的に行われていた。また、一部の書道愛好家の間では、千蔭流の上代様仮名が流行っていた。千蔭流は、松花堂昭乗に私淑した加藤千蔭（江戸末の書家）の書風である。彼の書は、優雅で弱弱しいが、わかり易く、習い易かったので流行したようである。



明治12年頃から明治30年頃にかけ、戦争に勝利し、列強に肩を並べたと思ったのか、欧米化運動への反動か国粋主義運動が徐々におこってきた。日本文学の古典が見直され、多くの古典が復刻され、尾崎紅葉や幸田露伴によって、国粋主義的な擬古典主義文学運動が興った（紅露時代）。

書道界でも、歌人を中心に、日本の古典、特に上代様の仮名が注目された。１８８７年（明治20）、初めて官報に平仮名、変体仮名が使われた。１８８８年（明治21）、宮内省御歌所が設けられた。宮内省に全国宝物取調局ができ、九鬼隆一、フェノロサ、岡倉天心、狩野芳崖らが担当官となり、博物館建設にむけて古美術収集が始まった。皇后の命により「百人一首」が書かれた。１８８９年（明治22）明治憲法が発布され、美術雑誌『国華』が創刊され、東京、京都、奈良に帝国博物館が建設された。そして、国家主義の凝縮のように、１８９０年（明治23）、宮家・公家などに所有されている上代様の書を閲覧し研究することを目的に、三条実美、東久世通禧、高崎正風、田中光顕、小杉椙邨、多田親愛、小野鵞堂、植松有経、大口周魚、阪正臣らによって**「難波津会」**が結成された（１年ほどで消滅）。この会は運動体ではないが、上代様仮名復興に大きな影響をあたえた。同年、小野鵞堂が**「斯華会」**を創り、鵞堂流が一世を風靡していった。難波津会と斯華会の名は、古今集仮名序にある手習歌「なにはづにさくやこのはなふゆごもりいまははるべとさくやこのはな」から名付けられたらしい。

古筆の研究で発見された最大の収穫は、仮名の線の本質が、御家流や千蔭流のように、ただ流麗でやさしいだけのものではなく、勁いものを秘めていることを発見したことであった。

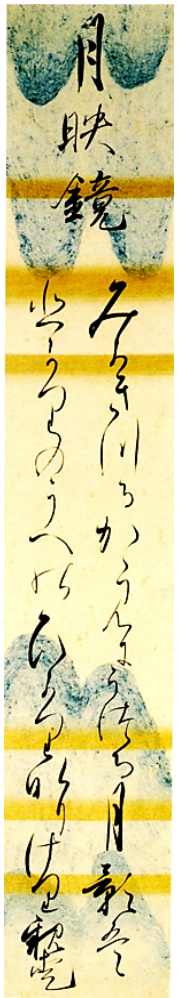


高崎正風「自詠歌凱旋」短冊部分
うみやまをとどろかしけ・・・
こゑよろづよにか・・・・・・

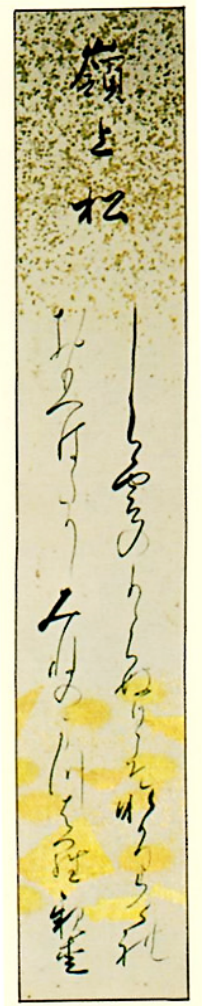
高崎正風（たかさきまさかぜ）（1836～1912）
歌人、作詞家。鹿児島市出身。宮中顧問官などを歴任。明治20年、男爵になる。明治21年、御歌所が設置されると、御歌所初代所長となる。桂園派復興の歌人で、明治天皇の歌道の師。
書風は、歌風と同様、温雅流麗。

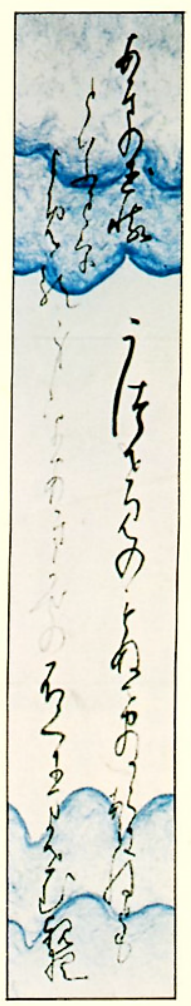
多田親愛「和歌」紙本 17×15 ㎝
はるたてば　花とやみらむ　しらゆきの
かかれるえだに　うぐひすのなく
古今和歌集　巻第一　素性法師（そせいほうし）の歌

多田親愛（ただしんない）（1840～1905）歌人、書家
江戸の出身。号は翠雲、雲亭など。博物局（今の東京国立博物館）に、明治7年から明治27年まで勤務、退職後、書に専念した。初め、御家流から出発し、明治17年頃から、博物館の古筆を借りて模写し、行成を中心に、独学で上代様を研究した。
特に、『歌合（うたあわせ）』（十巻本）の「寛平御時后宮歌合（かんぴようのおおんときさいのみやうたあわせ）」を学んだという。
弟子はとらなかったが、明治20年入門の、12歳の田中親美（たなかしんび）と14歳の岡麓（おかやもと）は例外であった。



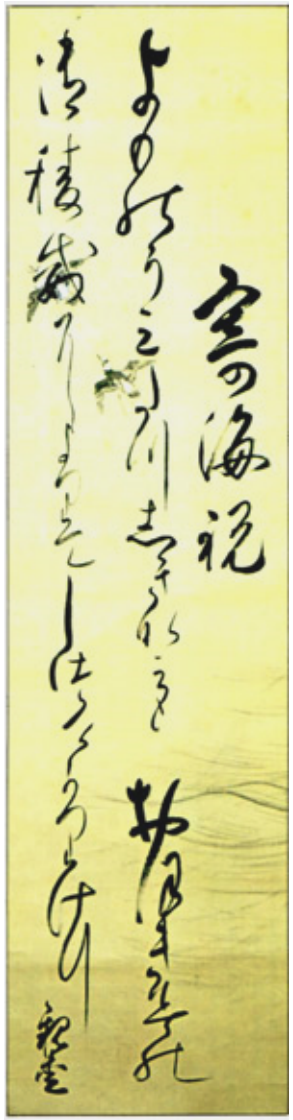
月映鏡　みがきつるかがみにうつる月影は　ひかりのうへのひかりなりけり　親愛





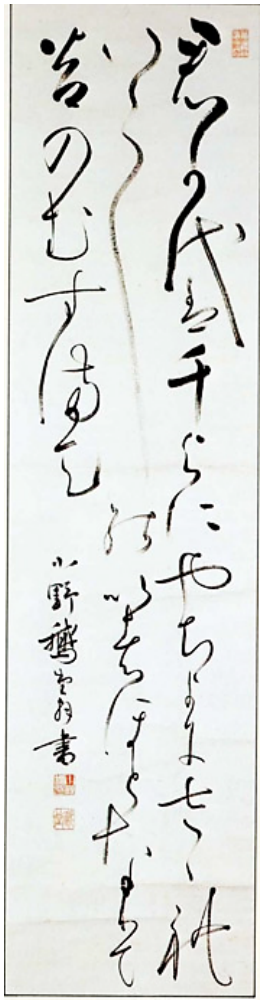
あきの述懐といふことをよめる　うつせみのもぬけのからにあらねども身をあきかぜのふくにまかせむ親愛

親愛は仮名と古筆の収集以外なにも興味がないひとであったらしい。
多田親愛の仮名の系譜は、近衛家熙→高野切第三種系とさかのぼれる。また、親愛から小野鵞堂へと受け継がれている。
短冊は、三つ折りにして、第一折にかけて一字目を書く（三つ折り半字がかり）、自詠歌は二行目も肩を揃えて書く、署名は半字下げる、など書式にかなった書き方で書かれている。

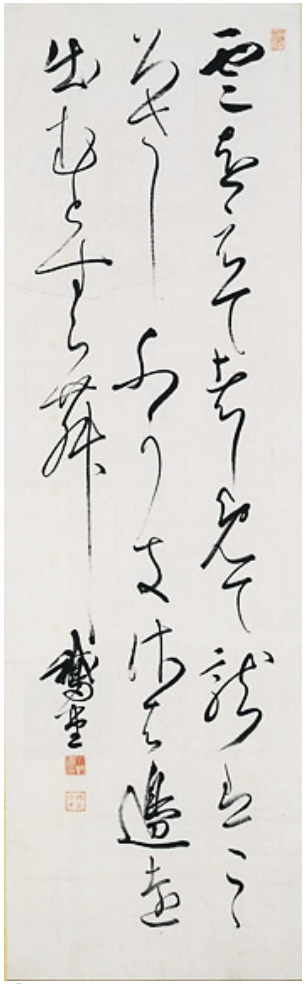


多田親愛「寄海祝」明治 28 年
146.7×38.5 ㎝　「寄海祝」は勅題

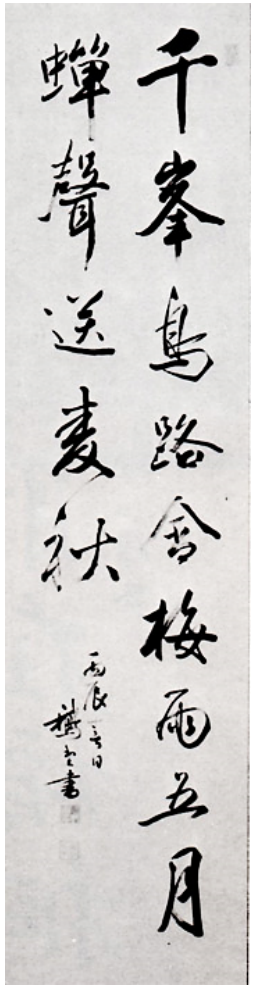
寄海祝　よものうみたつしきなみ
もおほきみの　御稜威（みいつ）
によりてしづけかりけり　親愛



鶩堂「君が代」1916年
136.5×33.5㎝



「雲をえてはしめて龍はここ
ろさしふかきさは邊を
出むとすらむ　鶩堂」



鶩堂「七言二句」1916年
行書　136.6×33.6㎝

小野鶩堂（おのがどう）

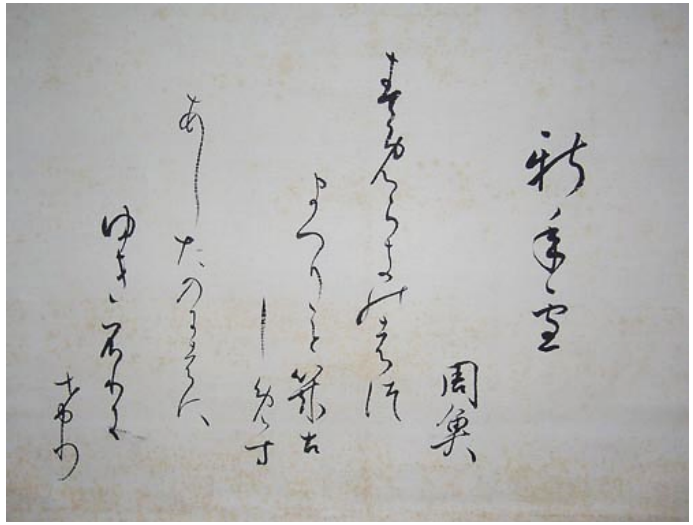
（1862～1922）

書家。静岡県出身。号は鶩堂。別号は斯華（このはな）翁、斯華書屋主人。

明治23年「斯華会」を創設。書道雑誌「斯華之友」を創刊、魚河岸の小僧や大蔵省書記などをして生計を支えながら、高野切第二種、智永千字文、王羲之の筆法などをほぼ独学で習得し一家を成した。

書の実用性と芸術性の融合を唱えた。華族女学校教授（後の女子学習院）を31年間勤めた、その平明清楚な書風は**鶩堂流**として、特に婦人のあいだで大流行した。

門弟に、中村春堂、高塚竹堂らがいる。



大口周魚「新年雪」懐紙　自詠の和歌　御家流の影がなくなっている。
新年雪　周魚　すめらきの　はつまつりこと　きこしめす
あしたのにはに　ゆきふりにけり

大口周魚（おおぐちしゅうぎょ）（1864～1920）

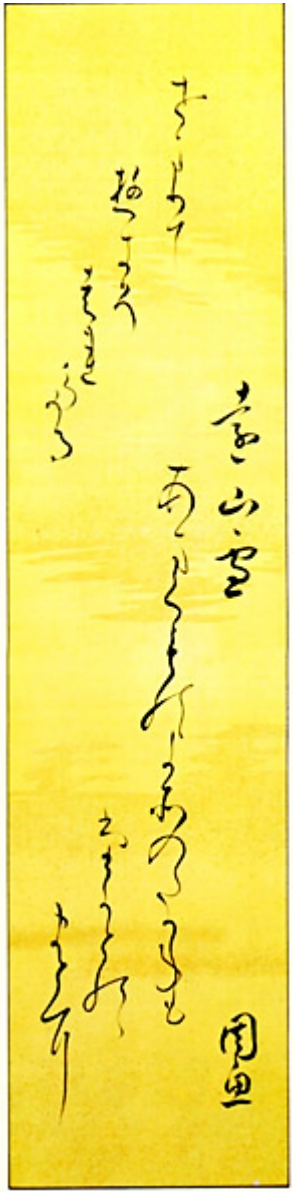
歌人、書家、古筆研究家、宮内省御歌所寄人（よりうど）。名は鯛二（たいじ）。号は周魚・旅師など。愛知県の出身。

歌の会の「千種会」を創設。会員数5万人にといわれる。高崎正風に師事し、古筆の研究と蒐集に努力し、古筆の研究成果を、『書苑』誌上などに発表した。

「西本願寺本三十六人家集」を発見、1年間かけて模写する。この大発見は、書道界や文学界、美術界に大きな影響をあたえた。古筆切を集めて作った手鑑（てかがみ）『月台（げつだい）』は国宝に指定された。「女子習字教科書」「金玉集略解」「大口鯛二翁家集」などの著書がある。

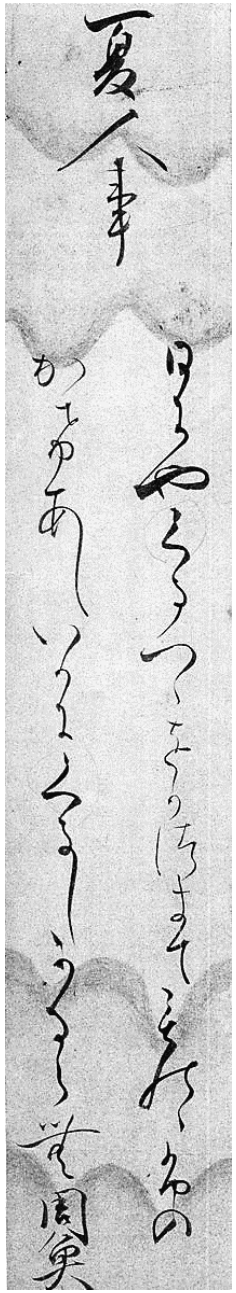
仮名は、多くを藤原行成に倣い、高野切第二種の系統といわれる、側筆基調の独自な書風を完成する。

門弟に尾上柴舟（おのえさいしゅう）らがいる。



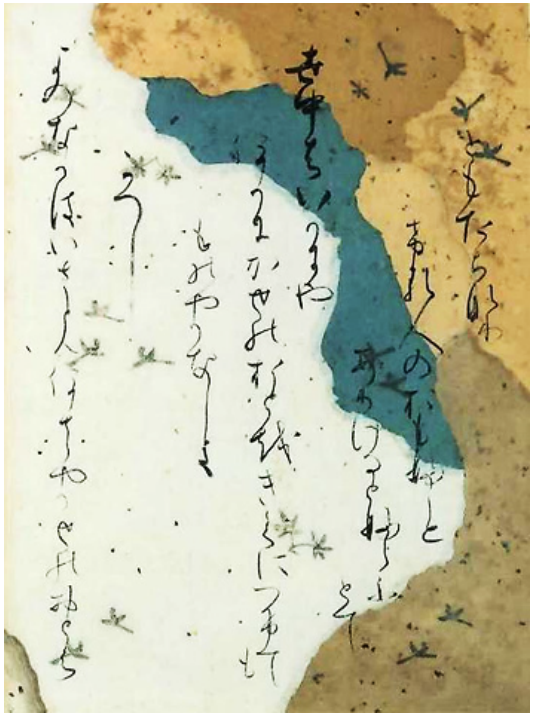
遠山雪　あまぐものよそのたかねもたかどののまどに　周魚
せまりてゆきぞはれたる

大口周魚「遠山雪」絹本
124.5×29.5㎝　金箔、野毛、
砂子を全面に撒いた絹。
高野切第二種風の書風



夏人事　ひにやくる　つつをかつきて　もののふの
かけあしいかに　くるしかるらん　周魚

大口周魚「夏人事」短冊



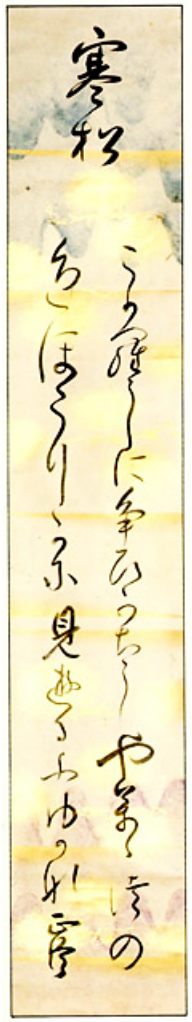
「西本願寺本三十六人家集」石山切（伊勢集の断簡）
平安時代(12 世紀)　五島美術館蔵

「西本願寺本三十六人家集」

１１１２年に、白河法皇の還暦祝いに宮中で制作されたと推定されている。その後、１５４９年に、後奈良天皇から本願寺の證如（しょうじょ）上人に与えられたという。

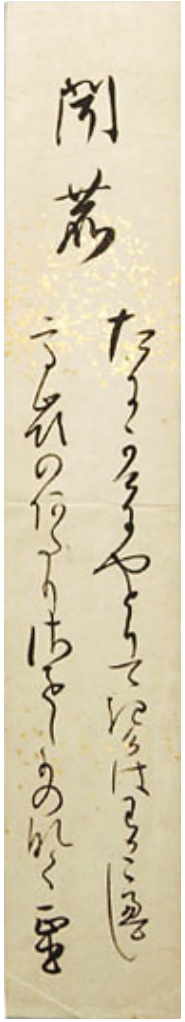
１８９６年（明治29）、大口周魚によって、西本願寺の庫裡（くり）から発見された。これは、平安時代末期に三十六歌仙の和歌を書写したもの。筆者は三跡ら複数。最高の料紙が使われている。藤原時代の美術の粋である。全部で39帖。国宝。

原本32帖が西本願寺に所蔵されている。



寒松　こがらしにあらそいかちしやままつの　色ほこりがに見ゆるふゆかな　正臣

阪正臣「短冊」



聞鹿　たにかけにやとりてきけはわかこえし　高嶺のあたりさをしかのなく　正臣

阪正臣「短冊」

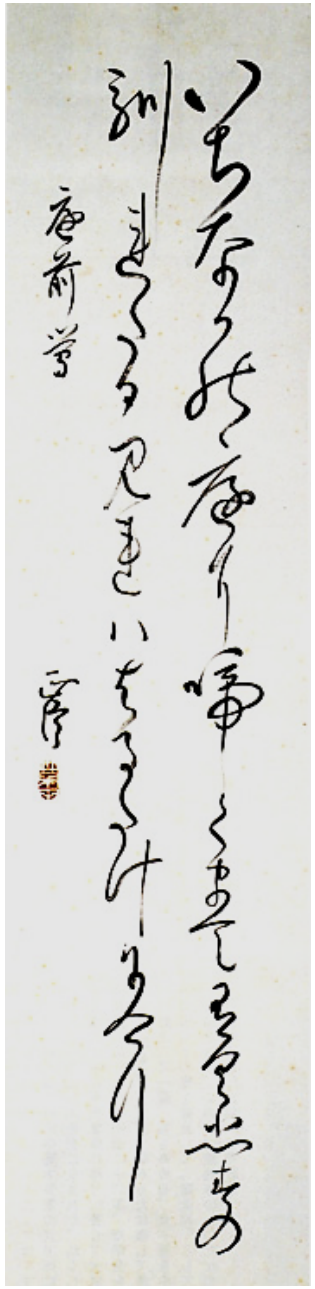
阪正臣（ばんまさおみ）

（１８５５～１９３１）

歌人、書家、宮内省御歌所寄人、古筆研究家。名古屋市出身。

華族女学校教授。女子用書道教科書の手本を書いた。

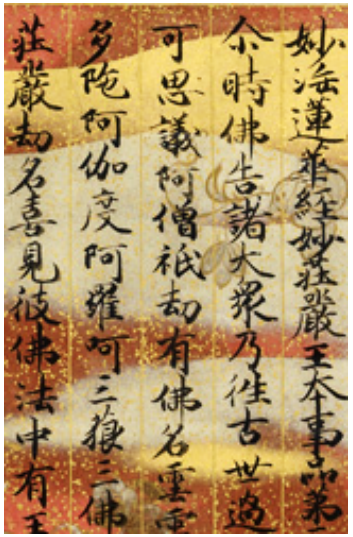
宮廷歌人として皇族たちに和歌や書を教えた。



いちなかの庭に啼くまでうぐひすの　馴れたる見ればはるたけにけり　庭前鶯　正臣

阪正臣「自詠歌」個人蔵

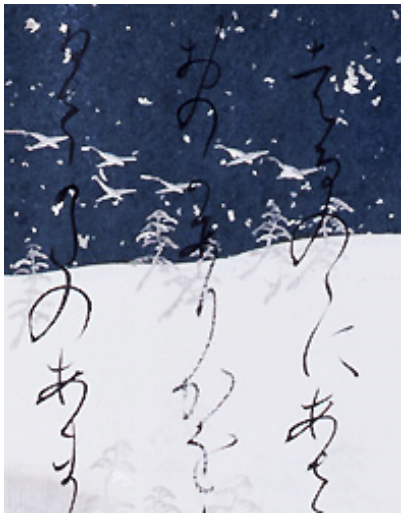
田中親美（たなかしんび）（1875・明治8～1975・昭和50）日本美術研究家、古筆の鑑定家・収集家　父は大和絵師の田中有美　本名は茂太郎　京都の出身　12歳の時、多田親愛に入門し書を学ぶ。これが、古筆古画模写の出発点であった。また、大口周魚と知り合い、周魚の発見した「西本願寺本三十六人家集」の料紙の美しさに惹かれ、これを機に、その後、『源氏物語絵巻』『平家納経』などの文化財の模本複製の偉業を成し遂げ、数々の国宝や装飾料紙の複製を制作した。昭和23年、日展の審査員となる。1950年（昭和25）文化財専門審議会委員に就任。百歳で没。尾上柴舟、飯島春敬、安東聖空、日比野五鳳らに大きな影響を与えた。



右の部分拡大

田中親美筆「平家納経（模本）厳王品」（全33巻、経箱1合）大正時代　東博蔵
原本は厳島神社所蔵、国宝、平安時代（1164年）

絵や書だけでなく、料紙、金具、銅製の経箱も模造されている。

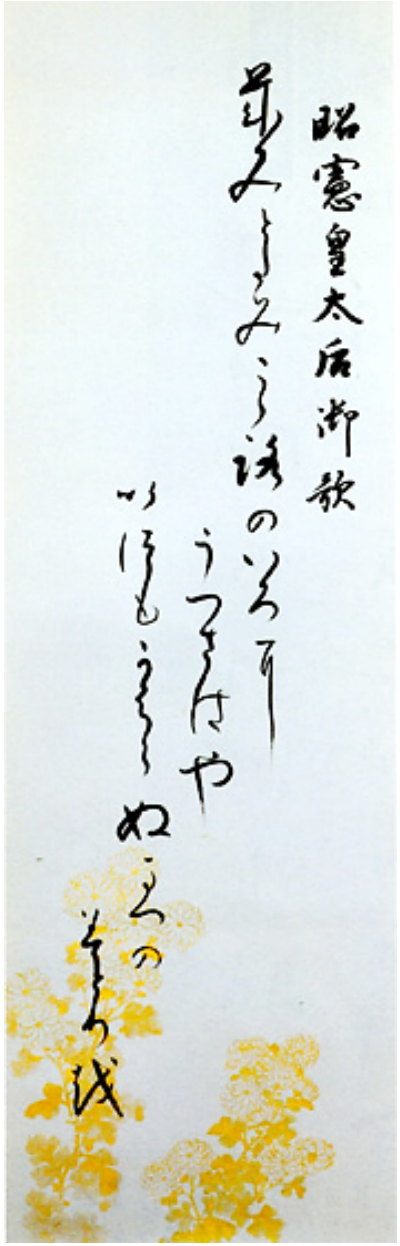


右の部分拡大

田中親美筆「西本願寺本三十六人家集（模本）」1907年（明治40）東京国立博物館蔵
原本は西本願寺所蔵、平安時代（12世紀）

岡山高蔭（おかやまたかかげ）（1866～1945）名古屋出身。

巌谷一六に学んだ。貫名菘翁、晋唐の書を研究。仮名は小野道風、藤原行成によって上代様を研究した。



岡山高蔭「昭憲皇太后御歌」（しょうけんこうたいごうみうた）昭和10年代
112.5×35㎝　昭憲皇太后は明治天皇の皇后

きみとたみこころのいろに　うつさばや　いつもかはらぬまつのみどりを

国宝「伝藤原行成筆『仮名消息』」三宝感応要録が紙背に書かれている　鳩居堂蔵　縦 28.2 ㎝

部分拡大

「仮名消息」とは、平仮名で書いた手紙のこと。紙の裏（紙背）に「三宝感応要録」が書かれている。これは、手紙を受け取ったのち、手紙の裏に書かれたものらしい。当時、紙は大変貴重なものだった。

行成の真筆ではなさそうだが、この連綿の美しさは仮名の美の極致といわれている。

冷泉為恭「山越阿弥陀図」1863 年（文久３）
大倉集古館蔵　折口信夫『死者の書』のモデル

冷泉為恭「『伴大納言絵巻』復元模写・中巻」部分　個人蔵

冷泉為恭「鷹狩図襖」部分　個人蔵

冷泉為恭（１８２３～１８６４）

復古大和絵派の天才絵師。

京狩野の絵師狩野永泰の三男。

京都所司代の酒井忠義が所有していた「伴大納言絵詞」を模写しに、酒井邸に通っていたため、佐幕派のスパイと勘ぐられ、長州藩士によって惨殺された。享年40歳。

死を予感し、肌身離さず持参していた「伝藤原行成筆『仮名消息』」を神光院の智満上人に託している。

彼は、田中親美の父有美の従兄、有美は為恭の門人でもあり、「大和絵の基礎には上代仮名の研究が大切である」という為恭のことばを親美に話して聞かせたという。

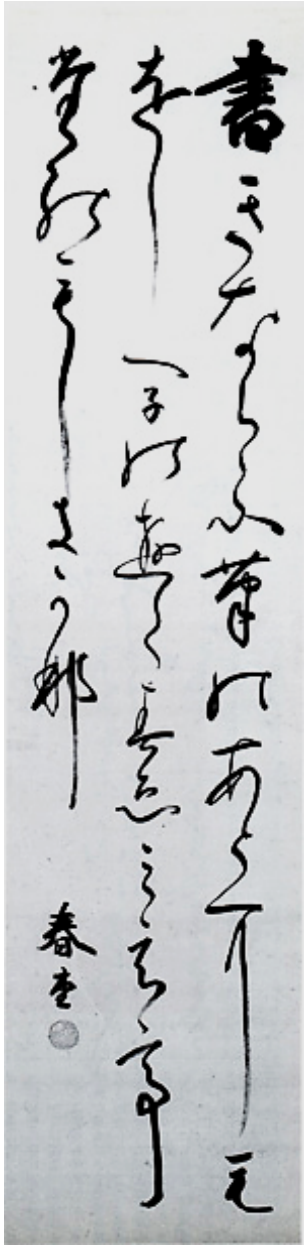
「冷泉為恭は上代絵画と上代仮名との一致を理想として、命を犠牲にして研究した画家である」（近藤高史氏）

彼は公家ではない。「冷泉」はかってに名乗ったものである。

中村春堂（なかむらしゅんどう）（１８６８・明治元～１９６０・昭和35）福岡県出身。

上京し、内閣法典調査会に奉職したが、１８９８年（明治31）小野鵞堂に入門、書を専門に研究し、かな書家として鵞堂流を継承。

書きならふ筆のあとにもをしへ子の　ゆくすゑみえてたのもしきかな　春堂

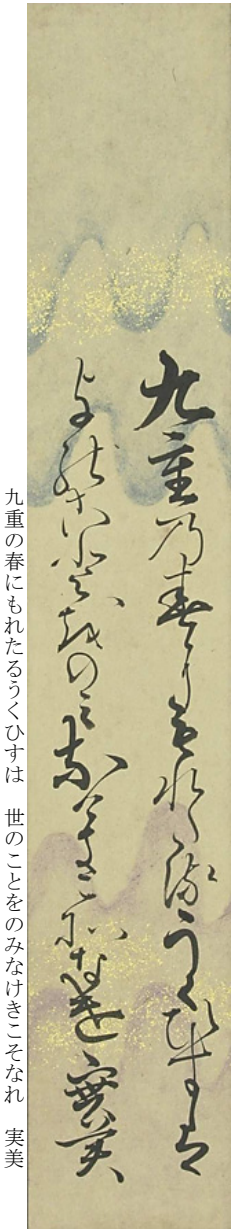


中村春堂「自詠歌」1930年頃
170.5×42.0㎝　大字かな

三条実美（さんじょうさねとみ）（１８３７・天保８～１８９１・明治24）公卿、公爵、政治家。京都出身。号は梨堂（りどう）。

明治政府の太政大臣・内大臣・などを歴任。貴族院議員、内閣総理大臣。

九重の春にもれたるうくひすは　世のことをのみなけきこそなれ　実美

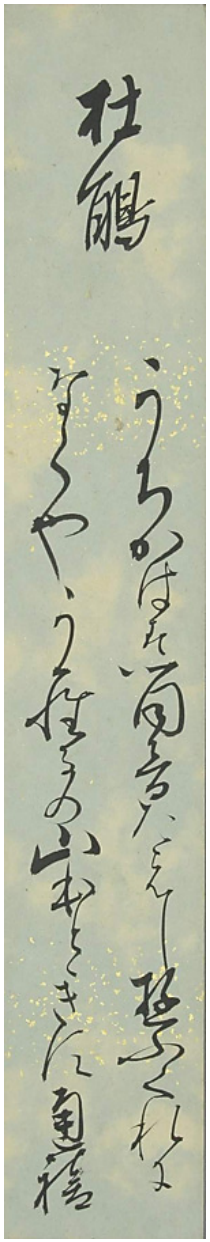


三条実美「短冊」
早稲田大学図書館蔵

東久世通禧（ひがしくぜみちとみ）（１８３３・天保４～１９１２・明治45）公卿、京都出身。号は竹亭（ちくてい）など。

貴族院・枢密院副議長などを歴任。

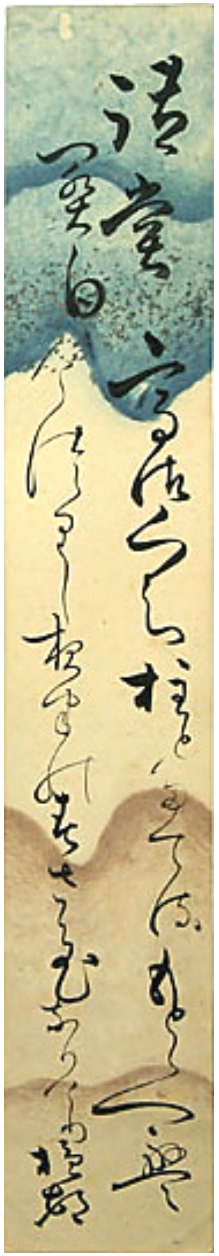
杜鵑　うちかはす筒音たえしゆふくれに　なくやう（ら）？（き）？の山ほとゝぎす　道禧



東久世通禧「短冊」
早稲田大学図書館蔵

小杉榲邨（こすぎすぎむら）（１８３４・天保５～１９１０・明治43）歌人、国学者。徳島県出身。号は杉園。

御堂関白　高御くら柱とたてるもとゝへは　けつりし夜半のすさひなりけり　榲邨

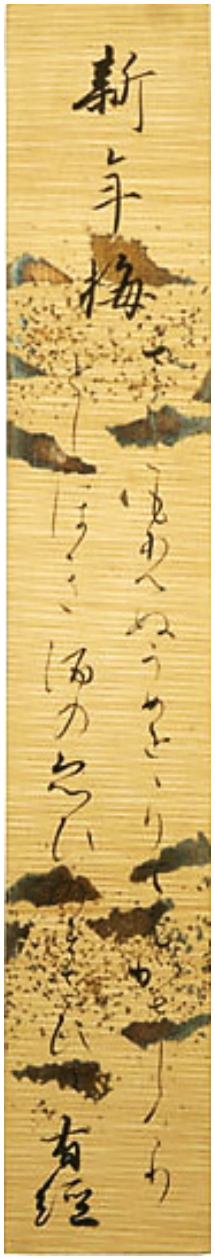


小杉榲邨「短冊」

植松有経（うえまつありつね）（１８３９・天保10～１９０６・明治39）歌人　名古屋出身　御歌所の参候兼録事・文学御用係。

明治21年、皇后の命により、多田親愛との合作で「百人一首」を書いた。絵は田中有美。

新年梅　さきもあへぬうめをゝりてもかさしけり　としほき酒のゑひのすさひに　有経



植松有経「短冊」